

国際交流基金助成事業報告書

大阪薬科大学 薬学部3年次生 野浦 梓

1. はじめに

平成25年3月18日から27日まで本学の国際交流基金の助成を受け、日通旅行主催のヨーロッパ薬学研修旅行に参加しました。私がこの研修旅行に参加したねらいは、欧米の医療や医療制度、病院・薬局のシステム、薬剤師のキャリアの積み方などが日本とどのように違うのかを知ることでした。

研修旅行中は、ロンドン、パリ、ハイデルベルグの3つの都市を訪れ、現地の製薬会社や薬局、病院薬剤部、大学の薬学部などを視察しました。この研修旅行には、北は北海道、南は佐賀県と、全国の薬学生が参加しており、1名の薬剤師の方を含む約30名の参加となりました。

2. ロンドンでの視察

ロンドンでは、まず、世界中に薬を輸出している製薬会社GlaxoSmithKline (GSK)の工場を視察しました。GSKは世界約150カ国150社に薬を輸出しており、オリンピックに出場する国の数、約200カ国と比べるとその大きさが分かります。主に呼吸器系の薬を製造していて、セレタイドや新製品のアリプターがその代表です。私達が視察した工場は、GSKで最も複雑な医薬品を開発しているところでした。工場内は全て撮影禁止でしたが、世界中に輸出する薬を製造するため、製薬の施設は各国の政府の規定を全て満たしていなければならないと、とても細かい規定が守られているそうです。工場は6.4ヘクタールととても広く、セレタイドの製造過程を見学するだけでもかなりの時間がかかりました。見学後、薬の研究開発をしている博士が、薬がどのように体の中で作用しているのか、その作用のしくみをどのように利用して薬をつくったのかということの説明をくださり、質疑応答を交えてとても有意義な討論ができました。

次に、ネルソン薬局を訪れました。建物の大きさは日本の地域の調剤薬局と同じくらいの施設でした。ここでは、ホメオパシーについて詳しくお話を伺いました。ネルソン薬局は、1860年にホメオパシーの薬局として開業したロンドンで最も古いホメオパシーの薬局です。ホメオパシーとは、人間が本来持つ、体を健康に保とうとする力、すなわち自然治癒力を刺激、促進することによって症状を改善する療法です。日本ではあまり一般的ではなく、医学的・科学的に証明されていないことから一部では社会問題になっていますが、英国ではホメオパシーは広く利用されており、国民健康保険NHSの適用内で、現在4か所のホメオパシー専門の病院があります。ホメオパシーの薬であるレメディは副作用がないため、乳幼児や妊婦、お年寄りまで幅広く利用できるそうです。私は、今回初めてホメオパシーの概念を知り、深く興味を持ちました。他の参加者の方も興味を持ったようで、ここでも質問が絶えず、また、質問に丁寧に答えくださり、とても有意義な時間となりました。



ロンドンでは、最後にRoyal National Orthopaedic Hospitalを訪問し、この病院で働く薬剤師の方にお話を聞きました。この病院は、骨の治療をする整形外科病院で、脊椎の治療ではトップクラスとされています。ここではいくつか日本のシステムとは違う点を知ることができました。まず、英国では資格を持っている薬剤師が処方箋を書くことができます。その資格を持っている薬剤師は現在1%ほどで、取得には大学に入学したときから数えて約10年はかかるそうです。次に、日本ではなじみのあるお薬手帳の役目を果たすものが一般的に利用されていませんでした。また、日本との共通点については、女性の薬剤師の割合が多い（女性：男性＝約7：3）ということと、治療に関して医師にほとんどの権限があるということです。後者については、患者を味方にするのであれば薬剤師がもっと活躍できるのではないかと熱く語っていただきました。この病院でお話を伺った薬剤師の方はどなたもとても熱い気持ちをもって仕事をしているのが伝わってきて、強く刺激を受けました。

3. パリでの視察

この研修旅行の日程には含まれていませんでしたが、本学薬品作用解析学研究室教授の大野先生のお計らいにより、大野先生のお知り合いで、現在パリで研究をされている石田さえこ先生にお会いすることができ、研究室を見学させていただきました。



この研究室では脳や神経の研究がされているため、ビルの形は右脳と左脳をモデルにしており、左右対称につくられています。また、病棟のすぐ近くに研究室を置き、臨床と研究を密にすることをコンセプトとしています。石田先生の専門は、家族性てんかんの原因遺伝子を探し、その遺伝子の機能を解析するというもので、研究結果から遺伝の変異をうまくカバーできるような治療法を考えるそうです。この研究室は大きな病院の研究室なのでさまざまな患者のDNAが保管されているDNAバンクがあり、研究に必要なDNAは注文すればそこからもらうことができます。研究室のシステムとして日本と違うところは、実験器具を他の研究室と共同で使うことができ、さらに実験器具を洗うチームもあるため、仕事が早くできるそうです。



実際の研究室を見学させていただき、とても貴重な体験となりました。大野先生、石田先生どうもありがとうございました。

4. ハイデルベルグでの視察

ハイデルベルグでは、薬事博物館、フランクフルト大学、そして現地の薬局を訪問しました。まず、薬事博物館では、薬の歴史的な話を伺いました。ドイツでは13世紀ごろから医薬分業が始まり、当時使われていた薬は動物や植物が原料であり、中には原料としてミイラを使ったものまであり、作るのにとても手間がかかりました。そのため、最初は製造も販売も同じところでやっていたのですが、それらが分けられるようになり、薬を製造するところが現在の製薬会社に発展していったといわれているそうです。博物館の中は、昔使われていた薬や、珍しい器具がたくさん展示されており、とても興味深かったです。



次に、フランクフルト大学では、薬学部のシステムを話していただきました。フランクフルト大学には約2,000人の学生が在籍していて、そのうちの800人程度が薬学部にも所属しています。ドイツの薬学部はカリキュラム統一制で、すべての薬学生は同じカリキュラムで学びます。ドイツでは、全ての学生が研究者になれるような教育の基礎を与えることを方針としており、そのためカリキュラムの45%が実験室で実験を行い、20%はセミナーにおいて自ら発表し、35%が講義です。ドイツの薬剤師国家試験は3回まで受けることができ、それ以上は受けられません。大学に入学してから薬剤師になるのには早くも5年、長くも7年かかります。質疑応答を交えてドイツの薬学部について知ることができ、とても参考になりました。この日は、フランクフルト大学に語学留学されている日本人の薬剤師の方にも出会い、良い刺激を受けられました。



最後に、ノルトウエスト薬局を訪問しました。ここでは薬局の中を視察しながら、ドイツの薬局のシステムについて説明していただきました。ドイツでは薬を売る権限は全て薬局が持っているため、夜中に処方箋をもらった場合は、決められた緊急用の薬局にいかなければなりません。そのため、当番制で必ずどこかの薬局が夜中でも開いています。どの薬局が開いているかは医師や新聞から知ることができます。数か月に1回のペースで当番が回ってくるので、どの薬局にも必ず薬剤師の当直室をつくるのが義務付けられています。他にも、例えば、検査室の壁は三方を壁で囲まなければならない、患者の秘密を守ることができる個室の相談室をつ

くらなければならないことなどが法律で義務付けられています。このように、日本のシステムとの違いを知ることができ、とても有意義でした。



5. おわりに

今回の国際交流基金助成事業により、この研修旅行に参加することができ、自分はどのような考えをもって薬剤師になればいいかということが漠然とではありましたが見えてきました。また、日本とヨーロッパの違いを学び、日本にも取り入れるべきだと思うこと、逆に日本に浸透していることで他国にも知ってほしいと思うことがあったので、その考えを将来的に活かしていきたいと思います。海外に行くことで学べるがたくさんあると思うので、本学の学生がこの国際交流基金助成事業を通じ、より一層国際交流に積極的に参加していくことを望みます。